第 68 回神奈川建築コンクール　住宅部門　最優秀作品選評
「素襲の家（そかさねのいえ）」

審査委員：古賀　紀江

擁壁の続く住宅街に凛として建つ住宅である。蛇籠を用いた造成と礎石の上に柱を建てる石場建ての足元が見える外観、石や木などの自然素材で構成された住宅は、現代の住宅街には極めて希少な、しかし、懐かしみのある雰囲気を醸し出していた。

この家には幾重にも建築家の意図がかさねられている。建築家の「意図」は、神奈川の住宅地に特徴的な擁壁による造成地の扱いに対する解を示すこと、伝統構法と自然素材を利用することで次世代に廃棄物を残さないこと、地域のモノと人の循環を大切にした建築を作ること、住まいに個人とまちとの接点をつくる、等々であった。それら意図が実直に「ありのまま＝素」に「かさね＝襲」られ、具現化された家である。

道路から 3m の高低差があった敷地の擁壁を取り払い、その後を小田原産の割栗石をつめた蛇籠でひな壇状に造成した土地に石場建てスキップフロアの家が建てられている。52 の礎石が置かれた地面、礎石に置かれた柱の間を抜ける風もこの住宅の大切な一部である。玄関の手前には職住一体を可能にして、「まちとの接点」となる二つの離れがある。中に入り 7 段ほど上がるとリビングルームが清々しく広がっていた。杉の香りと足裏の感触も心地よい。半階上には家族の個室が半開放的に並ぶ。視線をさらに上に転じると釘や金物を使わず組み上げられた構造がそのまま表しになっている様子が目に映り、美しかった。

この住まいの実現には伝統構法の技術と材料である良き木材の調達が不可欠である。これを担う力のある施工者とのタッグがあってこその本作であることも忘れてはならない。もう一点、木材の消費は森林を育て、水資源を守り、水害も防ぐ。かつて当たり前にあった家づくりの光景はそれ自体が環境の質を取り戻すことに繋がっている。

この住宅から発せられる未来への強いメッセージである。